

『“制約”の中で生まれるもの』 (要旨)

聖書箇所： I テサロニケ 2:17-3:5

【1】 苦難にあったテサロニケ教会

「…神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ」(使徒 14:22)、当時の使徒パウロが信者に語ったことです。彼はテサロニケ教会にも「苦難にあう」(I テサロニケ 3:3,5)ことを前もって伝えました。それは実際に苦難にあう時に信者が動揺することがないように励ますためでした(3:3-4)。そしてパウロが予告した通りのことが起こりました。すなわち「誘惑する者」(3:5)がテサロニケ教会の信者をキリストの福音から引き離すべく働きかけていたのです。その「苦難」は、ヤソンの家の襲撃(使徒 17:5-9, I テサロニケ 2:14-15)のように暴力を伴うものであったのか、あるいは柔らかな言葉によってパウロの伝えた福音に疑念を抱かせる(I テサロニケ 2:3-5)ものであったのか、はたまたその両方であったのか、パウロは詳細を述べていません。しかしパウロは、テサロニケの信者を信仰から引き離そうとする力に対して危機感を覚え、「私パウロは何度も行こうとしました」(2:18)と、顔を見て彼らの信仰を励ましたいと切望していたのです。



【2】 前もって知らされ、学んでおくことの意味

パウロはキリストを信じる者が「苦難にあう」ことを知っていました。実際にそうなった場合に、動揺することのないように「前もって」教えていました。ですから信者たちは、「苦難」にあった時に「そういえば、パウロ先生が言ったことだった」と思い出すことができたのでしょう。

「前もって」教えられていなかったら、自分たちが道を踏み外したから苦難にあうのだと考えたり、あるいは誤った教えだったのではないかと動揺することもあったでしょう。パウロによって前もって語られていることが、実際に信者の励ましになりました。

▷ 私たちも普段から聖書に親しみ学ぶことが大切です。心の中に蓄えられた御言葉は、何が悪い「誘惑」であるかを識別する助けとなり、苦難にあっても絶望することなく神に信頼するよう

励まします。

【3】 信仰の様子を知るために遣わされたテモテ

パウロはテサロニケ教会の信者に対して、「『前もって』教えたのだから問題ないだろう」と大上段に構えてはいませんでした。I テサロニケは基本的に「私たち」(一人称複数)の文章構成になっていますが、今日の聖書箇所では、珍しく「私パウロは何度も行こうとしました」(2:18)、「私もはや耐えられなくなって」(3:5)と一人称単数が登場します。なぜ「私」と記したのでしょうか。この「私」に続く文章を読むと、制約のある中で何とかしたい、あるいははしなくてはならない、というパウロの切実な思いが現れています。すなわちパウロは、「信仰者として正しい道はこうです」と手紙を送ったので後はそれに従ってくれば良いと突き放しはしませんでした。パウロはテサロニケの信者を「母親のように…いとおいしく思い」(2:7-8)、「自分の子どもに向かう父親のように」(2:11)命じました。パウロは苦難の中にあるテサロニケ教会を再訪して励ましたいと切に願っていました(17)。しかし、

自身の再訪は実現しませんでした。それでパウロは自分の代わりに「兄弟であり…同労者であるテモテ」(3:2)を遣わしたのです。パウロはテサロニケの信者の顔を直接見て、彼らの「信仰の様子」(3:5)を知り、その上でアドバイスをしたかったのでしょう。

▷ 私たちの信仰は、自分のことを気にかけてくれる信仰者の熱心な祈りと愛の励ましによって支えられています。

【4】 “制約”の中で生まれるもの

2000 年前の教会も“制約”がありました。こうした“制約”の中で信仰を励ます手紙が送られ、テモテが遣わされました。“制約”の中に置かれるからこそ、生まれる祈り、気づき、そして、新しい働きがあるのではないのでしょうか。